

市民シンポジウム「次世代にどのような社会を贈るのか？」

趣旨説明および講演要旨：人類は戦争をやめることができるのか？

森中 定治（日本生物地理学会、放送大学埼玉 SC）

日本生物地理学会は、山階芳麿博士、黒田長禮博士ら当時の著名な鳥類学者の助力を得て、鳥類学者の蜂須賀正氏博士と東京大学理学部教授で生物地理学の第一人者であった渡瀬庄三郎教授によって設立されました。同研究領域の学会としてはフランスに次いで世界で2番目、昭和3年（1928年）です。蜂須賀正氏博士は、平成15年（2003年）に行われた生誕百年記念シンポジウムにおいて“型破りの人”と評されました。自己の信念と哲学に基づいて時代を駆け抜けた人でした。渡瀬庄三郎教授は、区系生物地理学における旧北区と東洋区の境界を示す“渡瀬線”によって著名であり、特定外来生物として取り上げられるジャワマングースを移入しました。現在は特定外来生物として駆除の対象とされますが、当時困っていた野鼠やハブの被害を防ぐために生物学の知識を社会に役立てようと積極的に行動した強いパワーの持ち主でありました。日本生物地理学会創設者のこのような人となりを考え、学問を専門家の枠に留めることなく、人類社会に活かすことができればと思います。専門の研究発表やシンポジウムとは別に、この一般公開市民シンポジウムをもつのはこのような理由によります。

我々が生活を営むこの人類社会の終焉は、どのように来るでしょうか。

日本には1億2400万の人が住み、先進国として多様な食べもの、清潔な水、そして高い利便性を持ち、相応に恵まれた生活を享受しています。中国には14億1000万、インドには14億2000万の人がいます。ともに日本の10倍以上です。この人たちが日本、米国を追いつけ追い越せと世界的な展開を図ります。しかし、それらの国がコモディティー（生活用品）と生活の利便性において、日本と同レベルに至るためには地球が2.5個必要です（拙著『プルトニウムを解毒し脱原発・脱核兵器への道を切り拓く「生物学」的思考法』）。地球を2.5個にすることは不可能です。ゆえに、我々が公正と認め標準にしている現在の自由主義、資本主義のルールが破綻し、現在の人類社会の終焉が来るのは論理的な帰結のように思えます。

人類は、これをどのように平和裡に乗り越えるのでしょうか。

これこそが、我々現代人類の究極の課題ではないでしょうか。

「善悪に関心持たぬテクノロジー」 崩彦（中畑流万能川柳 2018.10.3）

どれほどAIが進歩しても、仮にシンギュラリティー（技術的到達点）が到来して人工頭脳が人間の管理を離れ、それ自体が自ら考え設計し生産するようになったとしても、どういう目的を持って生産を行うのか、それは我々人間がAIにインプットするのです。シンギュラリティーなど来ても来なくてもどちらでも同じではないでしょうか。我々人類は、これからどういう目的を持って人類社会を営んでいくのか、発展させていくのか。我々は今、その方向性を定めるべき歴史的な到達点を迎えたのだと思います。

人類は約 700 万年前に現生ではゴリラやチンパンジーなどの類人猿と別れ、森での樹上生活から地上に降り、そして平原に出ました。それからずっと続く地上での狩猟採集生活の時代、人類を食べ物にしようとする肉食の猛獣がたくさんいる厳しい自然環境の中で単独では生きていけず、集団で暮らすことによって人類は生命を永らえてきたのでしょう（山極著『暴力はどこからきたか—人間性の起源を探る』（2007））。

でも人類が集団間で戦争を始めたのはそのずっと後のこと、1-2 万年前のことです。人類の小さな集団に比べ自然は無限大でした。人類の集団と集団は争う理由がなかったでしょう。ところが1-2 万年前になり農耕が始まり食物を貯蓄できるようになると、人口が増え無限の自然も限界が出てきました。増えた人口に見合うだけの食料がなければ集団内に餓死者が出ます。隣接する他集団を襲い他集団が貯蔵した食物を奪えば自集団は生き残ることができます。このような人類社会を取り巻く環境の変化によって、人類集団の暴力が鍛えられ強くなっていったのではないかと私は推察します。

自集団が弱ければ他集団に滅ぼされます。たくさんの方がいる大きい集団は少人数の小さい集団よりも強いでしょう。だから滅ぼされた集団の女性は連れ去られ食物は奪われます。

こういった環境変化の中で人間の利他性が生まれました。

他集団と殺し合うのはもっぱら男の役割だったでしょう。自集団が勝つために自らの生命を顧みず戦います。このような男が多い集団と、自分自身の損得ばかり考える男が多い集団ではどちらが強いですか。このような利他的な遺伝子は集団内で進化するでしょう。利他的な男は自らの利得（適応度）を捨てて他人に尽くしますから、個人としては損ばかりで進化できません（消滅します）。でもその犠牲によって他集団を滅ぼし、その結果大きな利得を得ます。集団内の利他性による個々の損失の総和よりも他集団に勝つことによる利益が大きい場合は、その利益が集団内の個人に還元されるから、集団内の利他性が進化します。

けれども、このようにして集団内の利他性がどんどん進化し（その遺伝子が増え）、それにつれて他集団をどんどん滅ぼして強大化し、最後の敵も滅ぼし自分たちだけの一つになったらどうでしょうか。その途端、利益を奪うための他集団はもうないので、利他性は無用になります。利他性というのは自分の利益を他人に与える行為です。無用になった利他的な個体がたくさんいる集団の中で再び利己的な個体が現れ、それが利他的な個体を駆逐して利己的な集団に入れ替わり過去に戻るでしょう。ルールで縛っても個人が利己的ですから建前になります。

集団内では利他的、集団外には利己的、こんな形質の遺伝子は利他とは言えません。その利他性は元々利己に由来するからです。生物学では擬似利他という呼び方をします。これに対し真の利他（純粋利他）は、集団内にも集団外にも利他を示す形質です。それは、このような集団間闘争の中で現れ増えるものではありません。それは集団内の遺伝子頻度の増減を論じる集団遺伝学の外にあります。

現代における戦争、過去のキューバ危機、現在進行中のロシア・ウクライナ戦争、そして台湾有事を発端とする未来の日中戦争を考えます。キューバ危機では、キューバの要請に応じソ連はキューバに核ミサイルを置こうとしました。米国民の生命を預かるケネディ大統領はそれを見過ごすことはできず、世界核戦争

の縁まで行きました。でもソ連が核ミサイルを引き下げ人類滅亡の危機を防ぎました。

小国が隣の大国に不安を感じさせ、恐怖に陥れます。それが戦争を招きます。ウクライナが親米になりロシアに向けた核ミサイルを置けば、置かずとも未来におけるその不安と恐怖をロシアが感じれば、その不安を除去しようとするでしょう。台湾が親米になり中国に向けた核ミサイルへの不安が生まれれば、除去しようとするでしょう。台湾に限らず韓国でも日本でも同じでしょう。現代の戦争は1-2 万年前の集団間の食物の奪い合いのような分かり易い単純なものではないでしょう。現代の複雑な人類社会に複雑な要因が織りなしているでしょう。でも、自分自身の生命の保全が戦争の大きな目的であると、私は生物学の視点から捉えます。1-2 万年前の太古も現代も、戦争の動機は何も変わっていないのです。

こう考えると、人類が戦争をやめる方法が見えてきます。

「自分の生命の維持」つまり利己は、この地球の全生物の存在原理です。あらゆる生物がこれを持っています。でもこれ以外にも持っているものがあります。

答えはそこにあります。それは「有性生殖」という仕組みです。

私はこの講演で、1 種問題と2 人間の持つ真の利他（純粹利他）について話します。お話の内容は難しくありません。専門的な知識は不要です。学者のみならず一般の誰もが理解できます。

でも、それが本当にこの世に実在する生身の生物にあるのか、人間にあるのか、それを現実のものとして感じ取るには人類は壁を破る必要があります。

それができれば、人類は戦争をやめることができます。

少なくとも、人類が戦争をやめるための原理を持つことができます。

「原理」の不明な「功利」は、根なし草のようなものであり、「原理」を認識できなければ人類は戦争をやめることはできないと、私は思います。

私は、人類はそれができると思います。